

## タキイのネギ栽培マニュアル

## タキイの家庭菜園おすすめネギ

## ネギおすすめ資材

根深ネギ



ホワイスター

九条ネギ



ホワイソード

葉ネギ



九条太葱

ねぎ培土



小春

ホストマト



ホストマト



亜リン酸をネギの育苗期に  
施用すると生育が促進

## ネギの発芽と生育

発芽適温 18～22℃

高温(30℃以上)だと発芽不良になりやすい。

生育適温 16～20℃

根深ネギの軟白適温 10～20℃

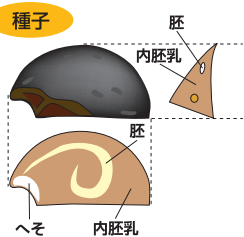
(最適温度15℃)

ネギ種子の寿命は最も短命なグループに入ります。乾燥には比較的強いですが、過湿にはきわめて弱くなります。土壌適応性は広く、pH5.7～7.4であれば正常に生育します。

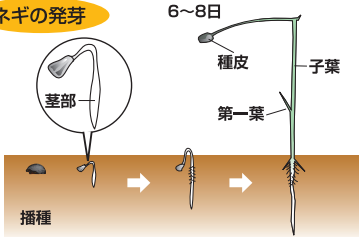


ネギの発芽

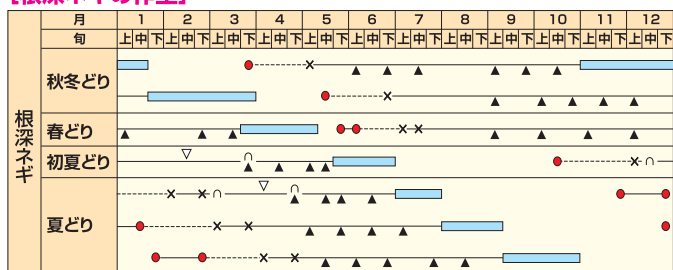
種子



ネギの発芽



## 【根深ネギの作型】



## ネギの抽苔と品種

## 【ネギの花芽分化と抽苔】

花芽分化は、ある程度生長した苗が低温に遭遇して起こるグリーンプラントパーナリゼーションタイプでタマネギと同様です。花芽分化の条件は品種によって差はありますが、一般的に葉鞘径が5～7mm、葉長が20cm以上に達した株が10℃以下の低温に30日間以上遭遇すると花芽分化をします。

その後の温度上昇と長日条件下で、抽苔が促進されます。秋まき栽培は通常9月～11月に行いますが、早まきほど抽苔の危険性があり、むやみな早まきは避けましょう。9月～10月まきの葉ネギの場合、翌年3月～4月に抽苔してきます。この場合、3～4月に摘蕾を行いましょう。

【ネギの品種】ネギは中国から伝わったと考えられており、大きく太ネギ群、葉ネギ群、その中間の兼用種の3群に分けられます。

それらが現在の加賀群、千住群、九条群として分布するようになったといわれています。関東では千住ネギが代表されるように、土寄せによ

って葉鞘部を軟白し太く伸びた白根(根深ネギ)を利用します。

一方、関西では九条ネギ(葉ネギ)を主に栽培しており、柔らかい緑葉部を利用します。葉ネギはよく分けつ(根元から株が増えること)する性質を持ちます。

品種群	休眠性	その他の特徴	主な用途	細分化した品種群
加賀群	深い		根深ネギ 根深ネギ 葉ネギ	加賀 下仁田 岩槻
		不抽だい性	根深ネギ	坊主不知
千住群	浅い		根深ネギ 根深ネギ 根深ネギ 根深ネギ	千住黒柄 千住合黒 千住合柄 千住赤柄
			兼用 葉ネギ 葉ネギ	越津 九条太 九条細
九条群	浅い		兼用 葉ネギ 葉ネギ	三州
		不抽だい性	葉ネギ	ヤグラネギ
その他	深い やや深い	やくら性	葉ネギ	晩ネギ
		晩抽性	根深ネギ	

## 播種と育苗

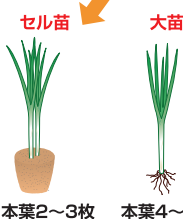
ネギは生育の揃いが苗質に大きく影響するため、温度管理(高温、低温)、灌水管理(過湿、過乾燥)に注意します。セルトレイやチェーンポットの育苗では、草丈20～25cmのころハサミなどで15cm程度の高さに切り揃え、再び20cmに伸びたころ再度刈り込む(剪葉作業)と、太くてがっちりとした苗に仕上がります。

セルトレイ(200穴)

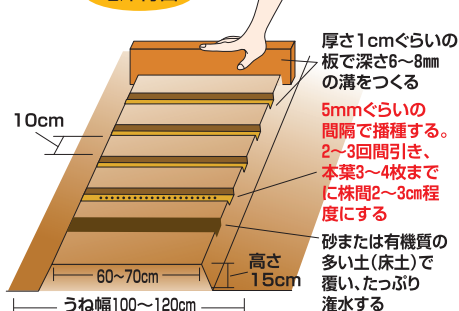
地床育苗



200穴のセルトレイが育てやすい  
1セルに2～3粒まいて覆土する



本葉2～3枚 本葉4～5枚



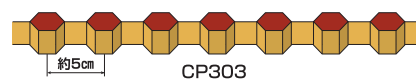
苗床の元肥は10㎡当たり成分量でN:Kで80～100g、Pで200～250gを目安に施用。  
追肥は播種後40日、60日後にNで40～50gを施用。  
育苗期間に、リン酸を効かせると根量が増加し、生育のよいネギ苗を作ることができます。

## チェーンポット

チェーンポットは、ペーパーポット(紙でできた育苗用ポット)の1つ1つが連結し、一度に連続して植えることができます。チェーンポットで育苗したネギの苗を、簡易移植器「ひっぱりくん」で移植することができ、定植時に省力栽培できる方法です。

(日本甜菜製糖)

規格	一本の直径×高さ(cm)	一冊の本数(本)	標準展開寸法タテ×ヨコ(cm)	育苗箱
CP303(株間5cm)	3×3	264	28×58	水稻育苗箱が利用可能
CP303-10(株間10cm)				
CP303-15(株間15cm)				



チェーンポットの播種



チェーンポットの定植

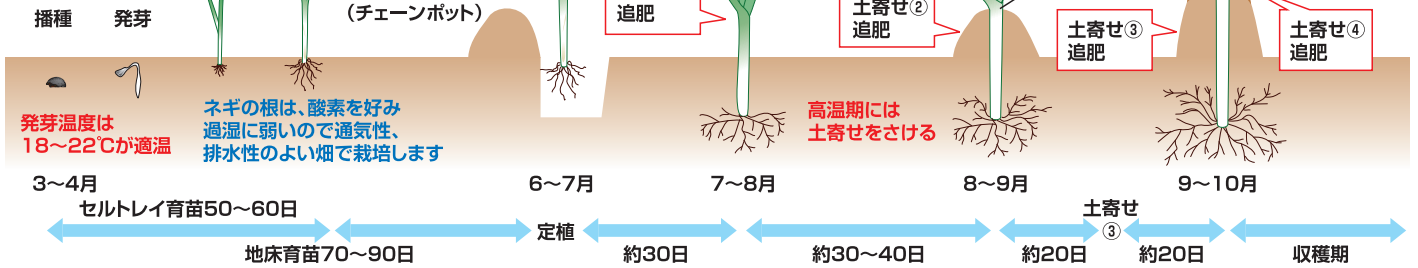


チェーンポットのネギ苗

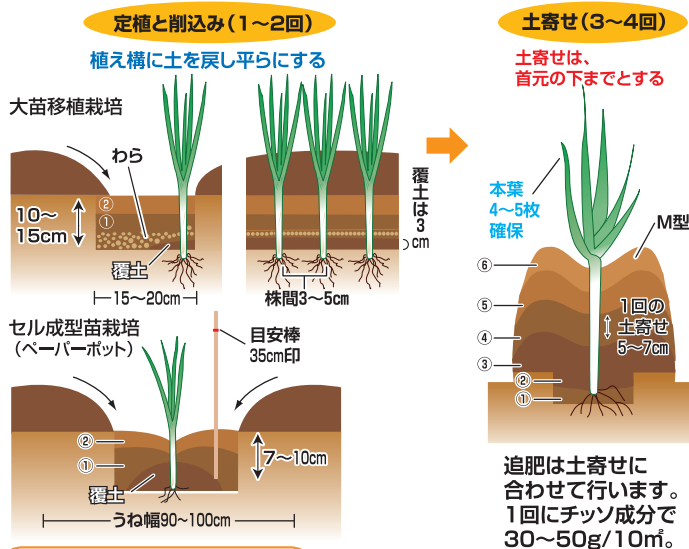
## 根深ネギの生育

春まき秋冬どり栽培

生育適温 16~20℃

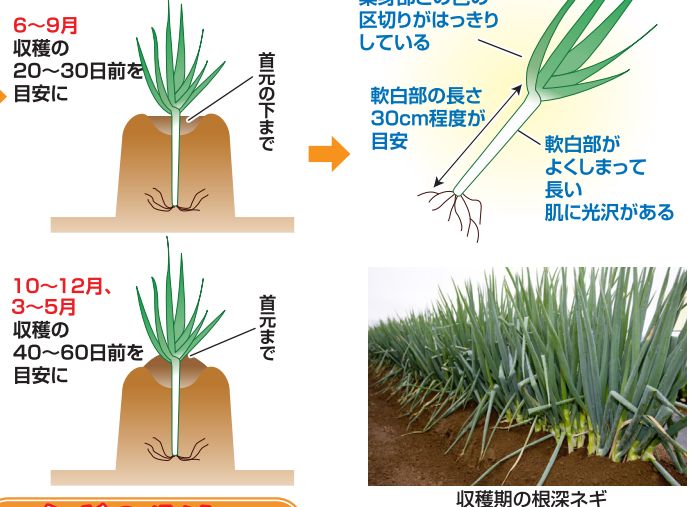


## 根深ネギの土寄せと追肥



止め土（最終土寄せ）

収穫



## 施肥量

元肥として根深ネギは、10㎡当たり成分で、チッソ、リン酸、カリそれぞれ100~150gを目安に施用します。

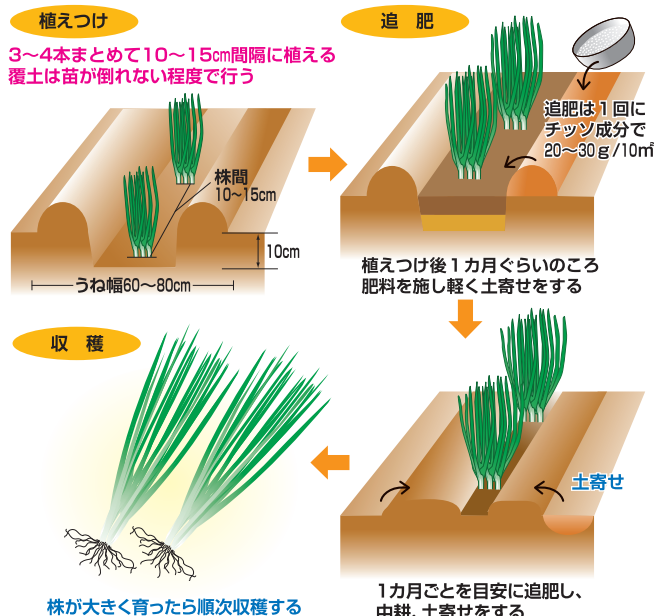
葉ネギの元肥は、10㎡当たり成分でチッソ120~150g、リン酸150~200g、カリ120~150gを目安に施用します。

## ネギの分けつ

分けつは茎盤に発生するえき芽が発達したもので、根元から株が増えています。葉ネギは分けつしやすい性質をもち、根深ネギ（1本ネギ）はほとんど分けつしません。本葉6~10枚のころに受けるストレス（乾燥、多肥、高温など）や収穫遅れにより助長されます。

## 葉ネギの定植と追肥

小ネギはすじまきを行い、株間1cm程度で栽培すると60日程度で収穫できます。九条系などの中ネギは育苗を行い、移植栽培するとよいでしょう。



## ネギの病害

## 【べと病】

葉に黄白色のぼやけた大型病斑を生じ、後に病斑上に灰色のカビ（胞子）を生じます。病原菌は糸状菌（カビ）で、春と秋に発生し低温で雨が続きと多発します。発生しやすい時期になれば予防剤の散布を行い、病気の発生を防ぐようにしましょう。



## 【さび病】

葉や花茎の表面にオレンジ色の小さな紡錘・楕円形の小さな小斑点を多数形成します。発病の激しい場合、葉全体に病斑が生じ、葉は黄白色になり枯死します。病原菌は糸状菌（カビ）で15~20℃で発病が多く、春と秋に発生し、24℃以上では発病しません。雨が多いときや、チッソ過多の場合は多発します。病斑を見つけたら、薬剤散布を行い初期防除につとめましょう。



## 【黒斑病】

病原菌は糸状菌（カビ）で、葉の中心に淡褐色病のくぼんだ斑点ができ、次第に拡大して同心円上で黒色すす状のかびを生じ、病斑から上部の葉は枯れて垂れ下がります。春から秋に発生し、24~27℃で、降雨が多いと多発するので、早めに薬剤散布を行うようにしましょう。

